春風秋霜 2月号

令和６年２月 21 日
島田市教育委員会だより
教育長　山中史章

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む　　佐藤一斎

1　「Ｈ３」ロケットの打ち上げ成功

２月 17 日に、種子島宇宙センターから「Ｈ３」ロケット２号機が打ち上げられました。今回の内容も、前回に続いて宇宙開発をテーマにしてみたいと思います。

日本は今まで「Ｈ２Ａ」ロケットを主力として運用してきました。しかし、「Ｈ２Ａ」ロケットは、１回の打ち上げに約 100 億円のコストがかかるという事実がありました。今回、JAXA と三菱重工業が開発した「Ｈ３」ロケットは、１回の打ち上げコストが「Ｈ２Ａ」ロケットの半分で打ち上げることができるようになるそうです。（半分といっても１回、約 50 億円かかるということですが・・・）

〈静岡新聞より〉

皆さんの中には、覚えている方がいらっしゃるかと思いますが、昨年３月に１号機を打ち上げた際、２段目のエンジンが点火しなかったために、打ち上げに失敗してしまいました。「Ｈ２Ａ」ロケットの成功率は約 98％という高い成功率ですので、新しい仕様の「Ｈ３」ロケットになって、失敗する姿を見るのは辛かったのですが、「失敗は成功の基」と言われていますから、今回の成功のための失敗だっただろうという思いもします。

実は、今回のロケット打ち上げの裏に、もう一つうれしい事実があることを紹介したいと思います。こちらの方がメインかもしれません。

皆さんは、以前ＴＢＳ日曜劇場で池井戸潤氏原作の『下町ロケット』というテレビドラマを放映していたのをご存じですか。私は、主人公の挑戦的な生き方が好きで、また、この番組を観るとなぜか元気が出てくることもあり、何度も何度も繰り返し観ていました。

今回の、「Ｈ３」ロケット制作で、静岡県駿東郡清水町にある航空宇宙部品メーカーの「エステック」という会社が、エンジンの噴射機やバルブやノズルの部品を製造し、部品を供給したということです。静岡新聞によると、『宇宙航空研究開発機構（ＪＡＸＡ）が 17 日に打ち上げに成功した国産新型Ｈ３ロケット２号機のメインエンジンには、清水町の航空宇宙部品メーカー「エステック」の製品が使われた。昨年３月の１号機打ち上げ失敗から約 11 カ月。新たに部品を製造した同社技術者は「感動的。無事に打ち上がってほっとした。」と笑顔を見せた。従業員約 40 人の「町工場」が、高い技術力を世界に示した。』と紹介されています。テレビドラマの中では、

Ｈ３ロケットの打ち上げが成功して喜ぶ鈴木誠一社長（右から２人目）ら＝17日午前９時40分ごろ、清水町

〈静岡新聞より〉

佃製作所という会社がエンジンバルブの特許を持ち、自分たちの会社でロケットの部品を作るという夢をもってそれに挑戦する物語でした。実際にそのような会社が、

静岡県にあるということがとても素敵だと思います。
話は変わりますが、先日床屋に行って、ご主人と話をしている中で、静岡県内には、世界的に有名なスピーカーの部品を製造している会社があるという話を聞いてきました。日本にある中小の町工場が今まで頑張ってきたからこそ、日本の自動車産業が栄えたり、様々な製品を生み出す機械を製造したり、素晴らしい技術を残してきたのです。昨今、大学での基礎研究に掛ける予算が削られたり、短期間で成果を出す評価制度を推し進めてきたりしている日本が、これからも世界をリードしていけるように、きちんと作戦を立てていくことが大事だと思います。また、島田市内には多くの優秀な企業がたくさんあることを、子供たちに知らせていくことが大事だという思いを強くしました。現在島田市内の小中学校で行っている各企業や行政と連携して実施している探究的な学習を進めていくことで、島田市にある多くの企業の存在を知らせていきたいと思います。
市内に住む子供たちが、島田にある「あの会社」で仕事をしてみたいと具体的に言えるようになったら素敵だと思います。
これからも、学校現場と行政、企業がスムースに連携できるよう、進めていきたいと思います。ぜひご協力をお願いいたします。

肘かけ椅子

「　長唄まち島田のこと　」

教育部長　　小松原智成

中学生時代に音楽の成績が「２」だった私、40 歳を過ぎて三味線を習い始めました。師匠は、長唄の重要無形文化財総合認定保持者の杵屋佐吉という方で、今は息子の杵屋佐喜さんに教わっています。中村勘九郎・七之助や市川海老蔵の舞台公演などの合間に指導に来るという感じです。ちなみに、佐喜さんの祖父は、黒沢明監督の映画「七人の侍」などで活躍した俳優の木村功さんです。「何故そんな人がわざわざ島田まで来てくれるのか？」という話をします。
時は宝暦年間（1751～1763 年)、東海道を旅していた長唄の名人吉住小三郎が島田宿でスリにあい困っていたところ、本通一丁目に住んでいた桑原家の方が快くお金を貸してくれたそうです。その御礼として島田大祭の屋台で小三郎が演奏してくれることになり、その後も、次々と有名な芸人達が島田に招かれるようになりました。
あれから 260 年余り、七代目吉住小三郎さんを始め多くの芸人さん達が、３年に一度、歌舞伎座や国立劇場の檜舞台ではなく、日本一質素な島田の屋台に乗るためにスケジュールを空けてくれています。そして地元の若者達は、芸人が最高のパフォーマンスを披露できるよう、きめ細かにサポートします。

そんなこんなで、この島田市に特別な思いを抱いてくれている長唄芸人さんが何人もいるというわけです。
地方創生の重要なキーワードのひとつに「関係人口の創出」があります。吉住さんと桑原さんの粋なエピソードは、時代を越えて関係人口を創出し続けています。